

# 訪問看護新聞11月号

グレース訪問看護ステーション城南

## 今月のテーマ『老人性難聴について』

高齢者とコミュニケーションをとる時、  
日々困ってしまうのが耳が聴こえにくく  
やり取りが上手くいかないことがあります。

そこで、どのように老人性難聴に対処すれば良いか考えてみましょう。

「老人性難聴」は加齢の変化により聴力が低下する難聴です。

### 老人性難聴の特徴として

- 30歳台から高い音から進行し低下します。
- 両耳がほぼ同じに進行します。
- 男性の方が低下しやすいと言われています。
- 高い音が聞きにくい、特に大勢の人がいる場所ではっきりとしないなどが特徴とされています。

耳は外側から「外耳」「中耳」「内耳」の3つの部分に分けられています。音は外耳道を通して、外耳と中耳の間にある鼓膜を振動させ、中耳にある耳小骨で増幅される。それが内耳の感覚細胞で電気信号に変換され、聴覚神経によって脳に伝わり、音として認識されます。難聴は、この音の伝わる経路のいずれかが障害されて起こります。外耳から中耳の障害で生じるのが「**伝音難聴**」で、耳アリの詰まり、鼓膜の損傷、中耳炎などが原因となります。内耳から聴覚神経の障害で起きるのが「**感音難聴**」で、メニエール病、突発性難聴、聴神経腫瘍などがあります。また老化や感覚細胞の変性が原因の老人性難聴は、この「**感音難聴**」に含まれる。

老人性難聴（感音難聴）は、下記の対応が良いと言われています。今後の看護等、高齢者に対してコミュニケーションをする時、参考になればと思います。聴力の低下はもちろん注意力の低下など話し手に対して意識させることも大事です。

- 気づかないうちに少しずつ進行し、自覚がないことが多い。
- 両方の耳に起こる。
- 高い音が聞こえにくい。
- 音としては聞こえるが、何を言っているのか明瞭に聞き取れない。  
例えば「魚（サカナ）」が「刀（カタナ）」に聞こえるなど、特に「カ行、サ行、ハ行」を含む言葉の聞き違いが多くなる。
- 早口の話がわからない。
- 周囲がうるさいと話がわからない。



- 静かな環境で話をする。
- 近づいて声をかけ、話し手に注意が向いていることを確認してから本題に入る。
- 低めのトーンでゆっくりと、言葉のまとまりを区切って話す。
- 補聴器をつけていない人へは少し大きめの声で、つけている人には普通の声の大ききで話す。
- 口の形や表情も重要な情報源になるため、明るい場所で正面から話すようにする。

